

2004 年度 外国人留学生入学試験「実技試験」「小論文」等の採点基準

学 科	内 容
彫刻学科	原則としては美術学部一般入試の合格水準を基本として、様々な国の実情や基礎実技に対する価値観の相違等を踏まえながらも、入学後の一般入試の学生との大きな実技レベルの格差が生じないか審査しました。具体的には、対象のモデルの特徴を的確に捉え、構築性や動勢なども意識しながら、モデルを含めた空間を把握できているかを採点基準として審査しました。
グラフィックデザイン学科	出題のねらいは、デザイナーとしてヴィジュアルコミュニケーション効果を造り出す為に必要なデザイン力を求めています。それには、創作の原点ともなる観察力、そこから生まれる発見やひらめきなどを描けるのかを審査し採点基準としました。
生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻	モチーフ(チリトリ)の一部(ハンドル)を自由にデザインした鉛筆デッサンと面接による評価を行ないました。鉛筆デッサンでは、モチーフの基本的な形状や、構造、材質感が描けているか、モチーフの一部のり・デザインに独創的で理にかなったアイデアが表現されているかを評価の基準としました。面接では、しっかりと自分の考えを伝えられるか、学習目標は明確かなどを採点基準としました。
環境デザイン学科	本学科の授業を理解できるだけの日本語能力があるか、日本で、また本学科で環境デザインを学ぶ意欲、目的意識がはっきりしているか、デザインを学ぶ上で最低限必要なデザイン力があるかを採点基準としました。
情報デザイン学科	日常生活における観察力、それを言葉で表現する記述力、事柄の仕組みや背景についての理解力、分析力、作品表現における構成力、発想力、独創力を評価し採点基準としました。
芸術学科	知識の量ではなく、まず日本語学習の達成度を審査しました。また各自が任意にたてた論述のテーマの着眼点が出題内容(今回の場合は与えられた展覧会カタログ)に対して的確なものであるか、論旨が明確であり、かつ説得力があるかといった点をも判断の採点基準としました。常識的、表面的にまとめあげた文章よりは、テーマに深く踏み込んだ内容のものである方が望ましいです。
全学科共通 小論文	論旨の一貫性、表現の的確さ・豊富さ、分量の適切さを採点基準としました。

「受験者がいない」あるいは「採点基準の公表を差し控えている」学科・専攻につきましては、掲載しておりません。

## 2005年度外国人留学生入学試験「実技試験」「小論文」等の採点基準

学科・専攻	実技試験(芸術学科は小論文)		面接	
	狙い・意図、採点のポイント		狙い・意図、採点のポイント	
			小論文 利用	実技試験 作品利用
日本画	描写力・表現力を総合的に所見し、採点基準としました。 具体的にはフクロウの羽やツメ・足やクチバシなどが良く表現されているか、全体のフクロウの形が描かれているかを見ました。	絵画に対する思考力・人格資質、学業に対する情熱を総合的に所見し、採点基準としました。		—
油 画	出題のモチーフはモデル(白のそでなしシャツにジーンズ、素足)が椅子に腰掛け両手でコップに生けた小型の観葉植物を持っているというものです。モデルと小植物という生きてあるもの、生きようとするものの取り合わせを形体、空間感、コンポジションを通じて造形的に表現してみなさいということです。人物の形体を適確に表現できているか、手に持った植物と人間の空間関係をどうつかまえているか、色彩が豊かに表現されているか、それらをどう総合して造形化できているかを採点のポイントとしました。	入学後、何をしたいか等、志望理由が明確か。自作の制作意図をきちんと述べられるか。美術全般に対して興味の持ち方、意欲、積極性をみました。 自国での学習の様子と日本語の力。		
版 画	描写力と画面の構成力(イマジネーションを含む)を確認。 一般入試の鉛筆デッサンのレベルは高く、そのレベルに比してどの程度か。	過去の作品および作品ファイルを参考に、熱意と性格、日本語の理解力を確認。日本の入学試験を突破して来た学生の中で授業に対応する力があるか否か。何故、版画を専攻するかの意識レベル。		
グラフィック デザイン	出題のねらいは、デザイナーとしてビジュアルコミュニケーション効果を造り出すために必要なデッサン力を求めています。それには、創作の原点ともなる観察力、そこから生まれる発見やひらめきなどを描けるのかを問います。	面接試験のねらいは、日常会話および授業に出てくる専門用語が理解できるかの把握とともに、授業への取り組みの意欲を把握します。そして、作品・ポートフォリオによって基礎的な造形力の評価を行います。		
プロダクト デザイン	鉛筆デッサンでは、モチーフの基本的な形や構造、材質感が描けているか、モチーフの一部のディテールに独創的で理にかなったアイデアが表現されているかが評価の基準となっています。	面接では、しっかりと自分の考えを伝えられるか、学習目標は明確かななどを採点基準としました。		
テキスタイル デザイン	テキスタイルデザインを学ぶために必要な基礎的観察力と色彩表現力を問うことをねらいとして出題しました。設問を正しく理解しているかどうか、独創的且つ調和的な構成がていねいに実現されているかどうかを採点のポイントとしました。	ひとつは、授業についていくことが出来る十分な日本語力を有しているかどうかを伺うために、もうひとつは、テキスタイルデザインを学ぶための意志や志願の動機を明確に説明できるかどうかを伺うことを狙いとして面接試験を実施しました。		—
環境デザイン	環境デザインを学ぶ上で最低限必要な基礎的デッサン力があるか。形、空間を把握し、平面上に表現する能力があるか。	本学科の授業を理解できるだけの日本語能力があるか。日本で、また本学科で環境デザインを学ぶ意欲、目的意識がはっきりしているか。デッサン以外のデザイン力をポートフォリオによって評価しました。		
情報デザイン	日常生活における観察力、それを言葉で表現する記述力、事柄の仕組みや背景についての理解力、分析力、作品表現における構成力、発想力、独創力を評価しました。	これまで学んできた内容と、本学での学習目標、学ぶ意欲、将来へ向けての目的意識について自分の考えを伝えられるかを審査し、採点基準としました。		
芸 術	知識の量ではなく、まず日本語の達成度を見ます。また各自が任意にたてた論述のテーマの着眼点が出題内容に対して的確なものであるか論旨が明確であり、かつ説得力があるかといった点をも判断の基準とします。常識的、表面的にまとめた文章よりは、テーマに深く踏み込んだ内容のものである方が望ましいと考えます。	まずは日本語の能力が十分であるのかをチェックした上で、受験生の知的能力が、芸術学科の専攻領域の研究を進めていけるだけのものを持っているのかを判定します。芸術学や美術史に関する基礎知識を持っているかも最低限チェックしています。外国人留学生の存在は、学部学生にとって大きな知的刺激ともなるので、人柄や性格についても選考の大きな要件となります。		

## 全学科共通小論文

日本語を母国語としない出願者を対象としているので、文章の巧稚は問題にせず、自分の意見を何とか日本語にまとめることが出来る能力に関して試験することとしています。出願者の中にはまだ日本語に不慣れな者も見受けられ、意見がまったくこちらに伝わらない場合は不可とする一方で、いわゆる「て、に、お、は」や誤字に関してはあまり詮索せず、入学後の日本語学習を継続させることで日本人学生と同等のレポートが書けるようになるのを期待しています。